

よのなかはつねにもかもな

第7期 OG 菊盛 真衣

「将来、今の自分には想像できないような自分になりたい」——泣きながら、私はそう話し、大学院進学
の決意の内を小野ゼミの皆に打ち明けました。まさか謝恩会でこんな告白をすることになるなんて！って、
内心思いました。多分、他の皆もそう思ってたんじゃないかな…。でも、こういった具合に、自分の思い
もよらない驚きのライフカードを引くことが、私らしい選択であって、その選択の連続が、私らしい人生
となっていくのだと、思い至ったわけです。いつか自分が死に行く瞬間に、なんだかんだでおもしろい人生
だったわ～！！って吹き出したいなど。若僧のくせに粋がりやがって、という感じですね。ええ、わかり
ます。

そんなこんなで、就職して会社員になっていく大半の卒業生とは違い、私は晴れて小野ゼミ大学院生に
なりました。大学院生になりたてホヤホヤの頃は、同期のいなくなったゼミにうまく馴染めないわ、新し
い生活リズムに慣れないわで、メンタル凹み気味でしたが、沈みきる暇もないほど、毎日とにかく必死で
した。それでも気付けば、ゼミにしょっちゅう顔を出してくれた白石幸太郎をはじめとする7期生や、い
つも親しく接してくれた後輩達のおかげで、私は凹から凸な感じに持ち直し、大学院生としての充実した
日常を送るようになりました。



卒業した同期と三田祭にて再会！（著者は前列中央）

大学院生としての日常
を過ごしていくうちに、
改めて強く認識したこ
とがあります。それは、「小
野ゼミ＝ファミリー」と
いうこと。今年度の入ゼ
ミ個別説明会で、小野先
生が2年生に伝えたメッ
セージでもあります。確
かに、学部生の頃も、「小
野ゼミ＝ファミリー」的
意識はありました。小野
ゼミが第2のホームと言
っていいくらい、私はた

くさんの時間をそこで過ごしたし、その時間を共有したし、家族のように信頼できる友達もできました。でも、その時は、まだ「小野ゼミ≡ファミリー」であって、私的にはむしろ「小野ゼミ≡ホーム」でした。「≡ファミリー」の本当の意味を、私はまだわかっていなかったのです。「≡ホーム」であるというのは、小野ゼミは、家族みたいに親しい人達の集まる場であり、安心できる家みたいな空間だったということです。でも、家族って、場所とか空間とか、そういう入れ物的なモノではないはず。「小野ゼミ≡ファミリー」の意味に気付いたのは、ある後輩との卒論執筆の日々がきっかけでした。



夏合宿先に向かう貸切バスの中で、卒論指導…
っていうか執筆協力。(疲労困憊の著者は右側)

夏休み前、その後輩(ちなみに紹介させていただくと、8期生の樋口優美)の卒論の進

捗状況は、学年のアンダー5に入るほど。夏合宿の卒論中間発表までに少しでも進めたいと、彼女が相談してきたのは合宿前夜。アホかと思いながらも、せっせと添削。翌朝も合宿先に向かうバスの中で、せっせと添削。っていうか、むしろ執筆。まわりの8期生からは、キクモリさんよくやりますね~と言われたけれど、自分的にはなぜだか彼女との共同執筆的活動が楽しかったのを覚えています。その後も一緒に集まってはコツコツ進め、猛烈なスピードで書き上げ、まさかの期限内合格。正直、かなり嬉しかったです。自分の論文が完成したときよりも感動しました。

なぜこんなにも嬉しかったのか、この理由こそ、「≡ファミリー」にあるのだと思います。自分のことはとりあえず置いて、彼女が立ち向かう壁と一緒に立ち向かい、彼女の背負う荷物を私も背負った、その結果、1つの成果を上げることができた——言葉にすればただそれだけのことです。でも、それは、時



先生と8期・9期入ゼミチームと。(著者は7期代表。ちなみに、樋口は8期代表)

間を共有するにつれ自分の家族のように思えた彼女の成功を、是が非でも叶えたいという祈りにも似た気持ちから生じた行動でした。もし彼女が小野ゼミ生でなく、ただの友人だったと

したら、私は同じような喜びを味わうことはなかったと思います。私が実感した「小野ゼミ＝ファミリー」精神は、昨年のOB会誌エッセイで、「小野ゼミの伝統は、『滅私奉公』に徹する姿勢、その1点に尽きる。」と述べた5期OBの池谷真剛氏の言葉に通じていると思います。

「＝ファミリー」であるというのは、自分のことを全部投げ出してでも、ファミリーの誰かのために全力を尽くす覚悟を持っているということです。これは、小野ゼミで脈々と受け継がれてきた精神文化であり、伝統であると確信しています。そして、この「小野ゼミ＝ファミリー」という伝統を守り、またそれを常に体現してきた人こそ、他でもない小野先生なのだとは日々感じるのです。小野先生や多くの尊敬すべき先輩がしてくれてきたように、私も小野ゼミの誰かのためなら、ひと肌でもふた肌でも脱いでやろうと改めて決意し、これからも邁進する次第です。

さて、このエッセイのタイトルですが、最近ハマっている競技かるたのアニメよろしく百人一首の「世の中は常にもがもな渚漕ぐ あまをぶね 海人の小舟の綱手かなしも」という和歌の一部を取っています。若干12歳で鎌倉幕府将軍となった源実朝が、波打ち際を漕いでいく漁師の小舟が、舳先に括られた網で陸から引かれている、そんなごく普通の情景をいとしく思い、世の中の様子もこんな風にいつまでも変わらず平和であってほしいと願いを込めた歌です。私には、この歌のような平和を願う「世の中」が2つあります。和歌っぽく掛詞なかんじです。1つは、字面通りの「世の中」で、私や皆が今生きている日常です。昨年は東日本大震災という、当たり前生きる平和な日常が根底から覆されるような出来事がありました。数年以内には首都圏・東海地方でも高確率で大震災が起こると言われていますが、私達の日常の平和をただただ祈るばかりです。もう1つの世の中は、「小野ゼミ」です。これまでの10年間変わらず、小野ゼミの中で普通に生きてきた「小野ゼミ＝ファミリー」精神が、これからの10年も変わることなく、卒業生を含めた全ての小野ゼミ生によって守られ続けることを祈ります。なぜなら、「＝ファミリー」精神が普通に実現されることが、小野ゼミの伝統であり、また平和であるからです。



著者にとってのファミリーと一緒に。第2回オープンゼミにて（著者は最後列中央左寄）